［別紙２］

審査の結果の要旨

氏　名　　田　中　　真　琴

本論文は、緩解期クローン病患者における総脂肪摂取量および脂肪酸の種類別摂取量の再燃への影響を明らかにするため、緩解期クローン病患者を対象に、食事とそれ以外の再燃関連要因を調査し、再燃をエンドポイントとした１年間の追跡調査を行い、以下の知見を得ている。

1. １年間の追跡期間中に再燃したのは 25 名(32.9%)で、緩解を維持したのは 47 名(61.8%)、脱落が４名(5.3%)であった。
2. 本対象の 7 割以上が、「食べると症状の出る食べ物」を認識し、それを避けていた。さらに、「体調悪化の兆し」を感じた時、大半が、食事の内容や量を変えることで対処していた。
3. 総脂肪摂取量は、再燃に有意な関連を示さなかった。
4. 多価不飽和脂肪酸の n-6/n-3 比は、先行研究とは逆向きに n-6 系多価不飽和脂肪酸比率が高いほど再燃リスクが低いという結果であった。疾患の状態が比較的長期間安定している患者と状態が比較的不安定な患者の食事摂取の違いが、n-6/n-3 比の違いとして現れていたと考えられた。
5. 飽和脂肪酸の摂取量増加は、再燃のリスクが上がることに有意な関連を示した。
6. 以上より、緩解維持のために、厳しい食事制限を可能な限り継続する必要はないと考えられた。疾患の状態が不安定である患者は、飽和脂肪酸をはじめとする総脂肪摂取量の制限が再燃のリスクを減じる可能性があるが、比較的長期に安定している患者が、自分にとって避けるべき食品を避け、徐々に制限を緩和してゆくことは、必ずしも再燃には結びつかないことが示された。緩解期 CD 患者の指

導においては、患者が注意深くセルフモニタリングを行い、自身の体調にあわせた食事あるいは休養をとれるように支援することが重要であろうと考えられた。

以上、本論文では、緩解期クローン病患者 76 名を対象に、食事とそれ以外の再燃関連要因を調査し、再燃をエンドポイントとした 1 年間の追跡調査を行い、総脂肪摂取量、飽和脂肪酸摂取量および多価不飽和脂肪酸の n-6/n-3 比のクローン病再燃への影響を明らかにした。

よって、本論文は、緩解期クローン病患者における食事指導に関して重要な示唆を与えており、独創性、臨床的有用性が高く、この点で、学位の授与に値するものと考えられる。